

本人2型糖尿病の新規感受性遺伝子とその責任 SNP を明らかにし、創薬の可能性についても示した。

2. アルコール性肝障害におけるメタボリックシンドローム合併と肝発癌の関連に関する検討

(消化器内科学)

谷合麻紀子・

橋本悦子・白鳥敬子

〔目的〕アルコール性肝障害 (ALD) におけるメタボリックシンドローム合併の実態を検討し肝発癌との関連を明らかにすることを目的とした。〔対象と方法〕1988～2009年までに当院で臨床病理学的に ALD と診断された425例を肝細胞癌 (HCC) の有無で HCC 非合併群と合併群に分類し、①全 ALD、②LC-Alc のみにおいて、肥満・高血圧 (HTN)・2型糖尿病 (DM)・脂質異常症 (DL) の頻度および慢性肝炎と他臓器癌 (既往を含む) に関して検討し、ロジスティックモデルで肝発癌危険因子を検討した。③初診時に HCC 非合併例を前向きに検討し、COX 比例ハザードモデルを用いて、ALD の肝発癌危険因子を検討した。〔成績〕①全 ALD: HCC 非合併/合併 258/167例、年齢 [中央値 (range)] 54 (27-84)/63 (43-85) 歳、女性の比率 16/4%、積算飲酒量 1.0 (0.3-8.0)/1.4 (0.3-8.4) ton/body、LC-Alc 合併率 54/72%、肥満 (BMI>25) 19/39%、HTN 19/40% DM 28/59%、DL 24/22%、慢性肝炎 3/2%、他臓器癌 5/6% (のべ 22例、重複癌 3例、胃癌 8例、食道癌 8例、頭頸部癌 5例、膀胱癌 1例)であった。多変量ロジスティックモデルで抽出された肝発癌危険因子は、高齢、男性、LC 合併、高積算飲酒量、DM 合併であった。②LC-Alc: HCC 非合併/合併 140/121例で、多変量解析で有意な肝発癌危険因子は、高齢、男性、高積算飲酒量、DM 合併であった。③272例の前向きコホート研究で、有意な肝発癌危険因子は高齢、男性、LC 合併、高積算飲酒量、DM 合併であった。〔結論〕ALD の肝発癌危険因子は、高齢、男性、LC 合併、高積算飲酒量、DM 合併であった。ALD 症例を経過観察するうえで、高リスク群を明らかにすることは効率的な HCC の拾い出しを可能にし予後の改善に繋がること期待される。

3. パーキンソン病の早期診断検査法の検討

(神経内科学)

飯嶋 陸

〔背景・目的〕パーキンソン病 (PD) では、運動症状が顕著となる時期には、既に 60% 以上の黒質神経細胞は変性し、線条体のドパミンは 80% 減少する。運動症状が出現する以前から、末梢の自律神経系、嗅球、下部延髄の神経変性が生じており、その症状として嗅覚障害、自律神経症状 (便秘、起立性低血圧)、レム睡眠行動異常、精神症状などの非運動症状が認められる。近年の薬物介入試験から、抗 PD 薬の早期治療により神経保護の可能性、脳の可塑性変化への効果や代償機転の軽減など可能性が示唆された。PD の早期診断・早期治療は、QOL の改善とともに病期進行の抑制も期待される。本研究では、PD

の早期診断検査法について検討した。〔対象〕遺伝歴のない PD 100 例。早期診断法として、嗅覚識別検査、心臓交感神経を評価する MIBG 心筋シンチグラフィ、および経頭蓋超音波 (TCS) による中脳黒質変性の評価を行った。〔結果〕健常者群に比し PD 群で有意に嗅覚識別機能が低下していた。MIBG 心筋シンチグラフィの異常は約 70% に認められた。TCS による中脳の検出率は 63% で、特に高齢者では低いものの、検出し得た患者の 83% に黒質変性 (高輝度) が認められた。〔結語〕嗅覚識別検査、MIBG 心筋シンチグラフィおよび TCS は、PD における変性過程の biomarker で、早期診断に有用な検査と考えられる。

〔一般演題〕

1. 電子カルテからの糖尿病患者医療情報の抽出とそのデータマート化

(第三内科学) 清村杏子・佐倉 宏・岩本安彦

我々は本学倫理委員会の承認のもとで、糖尿病センターのデータマートの構築を開始した。患者基本情報、検査所見、処方に関しては容易に収集が可能だったが、初診・入院病歴、退院サマリー、身体所見などのデータマートへの統合は困難だった。今回、電子カルテの入力用テンプレートを利用することにより、入院病歴・身体所見・退院サマリー (1,434名)、外来血圧・体重 (134万件)、保険病名 (54万件)、インスリン処方内容 (10万件)などを統合し、合計約 1,000 万件の医療情報を得ることができた。そして、structured query language (SQL) を用いてデータを抽出し、統計解析を行った。

医科病名が入力されている患者は、1型糖尿病 2,215名 (男性 36.1%、初診平均年齢 30.0歳、平均通院期間 10.4年、平均 HbA1c 7.6%)、2型糖尿病 18,018名 (男性 64.1%、初診平均年齢 55.9歳、平均通院期間 8.5年、平均 HbA1c 7.3%) だった。データマイニング手法によるデータ解析も開始している。データマートを構築して解析することにより当科通院中の多数の患者の病態・治療が明らかにすることができ、糖尿病診療における新しいエビデンスを提供できると考えられる。

入力用テンプレートを工夫して作成すれば、どの診療科においても効率よく通院患者のデータマートの構築が可能になり、診療の向上につながるだけでなく、医療収支の改善の方向性をさぐることも可能になると思われる。

2. ビスフォスフォネート投与に関連した顎骨壊死・骨髄炎の 3 症例について

(歯科口腔外科学)

田畑慎也・守田誠吾・

深田健治・岡本俊宏・安藤智博

〔緒言〕ビスフォスフォネート製剤 (BPs) は以前より悪性腫瘍の高カルシウム血症や乳癌、前立腺癌および肺